

3000DLありがとうございます

## いつか恋敵に

※オーリが眠らなかった場合の、あり得た未来のIFSです。

エロは少年ハーランの自慰がちよっとだけ。

1

自分で言うのもなんだけど、マセている方の子供だったと思う。

両親は子供の前で愛を語ることを躊躇しなかったし、好きな人とはキスをしたり、デートをしたり、結婚したりするものだど、ほとんど物心ついたころから知っていた。

ハーランは十歳の頃、七歳も年上のお姉さんが好きだった。

同い年の女の子なんて子供っぽいと思っていたし、自分も早く大人になって、彼女の隣に立ちたいと願っていた。

ハーランが十一歳の頃、兄のように慕っていたヴィスクが、十五歳になって孤児院を出た。泣いて寂しがるハーランに、ヴィスクは「大人になったら、ここを出る決まりなんだ」と教えてくれた。

「お前も十五歳になったらここを出るんだからな」

そんなヴィスクの言葉に、ひどくびっくりしたことを覚えている。

十一歳のハーランには、まだ未来が上手く想像できなくて、このまま大人になっても、ずっと同じように暮らしていけるんだと思っていた。

大人になったら、孤児院を出なければならぬ。

そうしたら、大好きな彼女と——オーリと離れなければならない。

そう思ったら耐えられなくて、その日は泣きながらオーリのベッドと一緒に眠った。

何度も何度も目を覚まして、オーリがちゃんとそばにいるか確認したものだから、寝不足になったのを覚えてる。

孤児院の子供たちは、普通、孤児院の職員から勉強を教わる。

だけどハーランだけは、孤児院から町の学校に通っていた。

ハーランはもともと、裕福な商人の子供である。

だが両親を事故で亡くしたあと、ハーランから財産を取り上げようとする大人が多すぎた。

そういう状況を見越していた両親が、念のためにと残してあった遺言状によって、ハーランは一時的に、亡き両親と旧知だった孤児院の院長に保護されているのだ。

だからハーランにだけ、かなりの額の小遣いが与えられたし、服も古着ではなく新品を自分で選ぶことが許されていた。

後見人である孤児院の院長は、ハーランが孤児院を出た後に、世間と価値観がずれないようにと気を配っていたのだろう。

その結果、ハーランは孤児院で浮いた存在になる。

孤児院にいるけど、なんだか違う。

特別扱いされている。

周りの子供たちも、自然とハーランを特別扱いするようになった。

特にハーランは、孤児院の子供たちにお菓子や本をプレゼントすることに何の躊躇もなかったから――。

ありていに言えば、ハーランは媚を売られる存在だった。

だがヴィスクは、決してハーランを特別扱いしなかった。

孤児院の子供たちの一人でありながら、職員であるオーリをよく助け、悪いことを悪いと叱り、良いことを思い切り褒めた。

オーリと、ヴィスク。

ハーランはこの二人が大好きだった。

この二人には思い切り我儘を言えたり、泣いて、怒って、時には悪口を言ってケンカもできた。

家族を失ったハーランが、本当の意味で家族のように接することができたのは、孤児院の中でこの二人だけだった。

だから、まあ――。

嫌でも気づいた。

ヴィスクがオーリを愛していることに。

そしてどうやら、オーリがその愛を受け入れたらしいことに。

そのときヴィスクは十八歳。

親類のツテがあるとかで、教師を目指して貧乏学生の真っ最中だ。

孤児院を出てからも、ヴィスクはちよくちよくオーリに会いに来ていた。ついでに孤児院の子供たちと遊んでくれるから、ヴィスクは孤児院を出ても人気者。

それに対して、十四歳のハーランは孤児院でますます浮くようになっていた。

受けている教育の水準が違いすぎて、誰とも話が合わない。

だから子供たちに勉強を教えてやったりするけれど、ヴィスクより高度な教育を受けているわけじゃないので、上手く教えられないことも多い。

十四歳にもなって、泣きながらオーリの後ろをくつついて回るわけにもいかないし、ヴィスクが遊びに来て、無邪気に遊んでもらえるような子供でもなくなってしまうた。

「お前、最近俺に冷たくねえか？ 思春期？」

なんて、ヴィスクが無神経に聞いてくるのもイライラする。

何が思春期だよ。

学生のくせに勉強もしないで、女の尻を追いかけてるのはどちらさまですかね。

——と、喉まで出かけて飲み込んだ。

こんな品のない悪口をオーリは絶対に許さないし、そもそも完全な負け惜しみでかっこ悪い。

十八歳のヴィスクは誰よりも背が高く、高い服を着てるわけでもないのに、立ってるだけでキマってる。

孤児院出身のくせに所作もきれいだし、子供たちに本を読み聞かせる声には通行人が聞き入るほどだ。

ふとした瞬間、ヴィスクとオーリは視線を交わして微笑み合う。

周りに気づかれてないと思ってる？

みっともないくらいバレバレですけど。

「なあ、あれやめてほしいよな？ お前もそう思うよな？ なあ、聞こえてんだろ無視すんなよなあなあなあ」

「うるさい、頼むから死んでくれ」

こここのところ、ハーランは図書室に引きこもっている。

最近までその存在を強く意識したことはなかったけれど、孤児院にはオーリとヴィスク以外にもう一人だけ、ハーランを特別扱いしない人物が存在した。

根暗のパストル——絶対に笑わない、図書室の幽霊だ。

病的に痩せてる上に、不気味な赤い目と不健康な白い髪という容姿のせいで、子供たちの間ではそう呼ばれていた。

歳はハーランよりふたつ下で、十二歳。

なのに死ぬほど生意気だ。

ハーランの存在を完全に無視し、ちよっかいをかけまくるとようやく「死んでくれ」と返事をするような相手の方が、今のハーランにはちょうどいい。

なにより、ハーランは知っているのだ。

この無表情と無感動の権化のような存在が、オーリの前でだけデレデレの笑顔を見せることを。

つまり、だ。

「お前だってオーリが好きなんだろ？」

「だから？」

「ヴィスクに取られて悔しいだろ？」

「取られてないし悔しくない」

「ふーん。ま、お前まだ子供だもんな。わかんねーよな。男と女なんて」

パストルは静かに本を閉じ、立ち上がった。

書棚に本を戻して、別の一冊を持って戻ってくる。

それをハーランの前に静かに置いて、パストルは去っていった。

表題は『家庭の医学』

なんとなく開くと、性行為についての詳細や、それにまつわるケガや病気の対処法が書かれたページにしおりが挟んである。

きつと、去り際にパストルが挟んでいったんだろう。

ハーランは思わず本を閉じ、改めてそつと開くと、ついつい熟読してしまった。世の中には知らないことがたくさんある。

そしてその夜、オーリとヴィスクが裸で抱き合っている夢を見た。

最悪の悪夢に、悲鳴を上げて飛び起きる。

「……もう無理。頭変になる……」

十五歳になったら、孤児院を出なければならぬ。

そういう決まりだ。

でも別に、十五歳になるまで出て行っただけじゃいけないわけじゃない。

来年、十五歳になった時に滞りなく孤児院を出ていけるように、独り立ちの準備は少しずつ整えてあった。

小さいながらも、町を中心に部屋を借りた。

今は運び込む家具を選定している最中だが、とりあえずベッドがあれば寝泊まりには困らない。

仕事だって、両親の旧知の商人に、見習いとして雇ってもらうことが決まってる。

生活費だって、小遣いをためて始めた商売が小規模ながら上手くいき、両親の遺産に手を付けなくてもやっていけるくらいは稼げてる。

決意したら、行動に移すのは一瞬だった。

ハーランは孤児院の院長に「来週ここを出ようと思います」と伝え、一時間ほどの話し合いで承諾を取り付け、すぐに荷造りにとりかかる。

一分一秒でも早く孤児院を出たかった。

ヴィスクとオーリから離れたかった。

ほとんど逃げるような気持ちで、ハーランは鞆に荷物を詰め込む。

ああ、まったく——どうしてこんなに余計なものが多いのか。

着られなくなった服は全部おいて行こう。きつと誰かが着てくれるから。

なんだこのオモチャ？ 一つ買ったんだ？ ほんとに僕が買ったのか？

いらぬ、いらぬ、捨てていこう。

それから、それから——。

「ハーラン！」

急に、部屋にオーリが飛び込んできて、ハーランはぎくりとして荷造りの手を止めた。

「さっき、院長先生から聞いて……来週出て行くって……」

「まあ……うん。もうほとんど準備もできてるし。何も十五歳まで待つてなくてもいいかなって」

「でも……まだ十四歳なのに」

「あと半年で十五歳なんだから、ほとんど変わらないよ」

何てことない風に笑って答えるハーランに、オーリは困惑の表情を崩さない。

そして、ハーランの手元を見た。

「荷造りしてるの……?」

「うん。僕、荷物多いから、少しずつ整理しないと」

「……そっか」

「だつてさ……ほかの子たちは相部屋なのに、僕だけ個室なんだもん。なんか部屋がスカスカだと落ち着かないし……だから、どうしても増えちゃつて。でも、ほとんどいらなんだ、本当は」

「そうなの?」

「うん。明日、みんなを集めて言うよ。『好きなもの持つていっていいよ』って。オーリも何か欲しいものあったら……あ、そうだ！ オーリにだけ、先に選ばせてあげる。品物としては、どれもいい物だよ。自信あるんだ。例えば——」

オーリに背を向けて、棚の上に手を伸ばしたハーランを、オーリは背後からそつと抱きすくめた。

ひ、と喉が引きつって、ハーランは凍り付く。

甘い香り——オーリの香り。

「……オーリ?」

「何もいらないよ、私。ハーランといられる方がいい」

「だから……どうせ半年後にはいなくなるんだってば」

「その半年で、いろんなことをしようって、院の子供たちと話してたの。みんなハーランが大好きだから、お別れが寂しいから、たくさん思い出を作ろうって」

ああ、この――。

あまりにも清らかで、疑いを知らない、甘やかな家族愛。

サビ釘を撃ち込まれたように胸が痛いのに、背中に当たる柔らかな胸の感触と、ハーランを抱きすくめる腕の暖かさが、ハーランの下半身にじわりと熱を集めた。

頭に、悪夢がよみがえる。

夜、オーリはヴィスクと抱き合って、どんな顔で、どんな声で――。

「ごめん……ちよつと、離して……」

「どうして？」

「どうしても！ いいから早く！ 出て行けよ！」

荒々しく怒鳴ると、オーリは驚いたようにハーランから離れた。

どんな顔をしているか気になったけど、ハーランは振り向けない。

「ハーラン……ねえ、私、何か怒らせること……」

「うるさい！ 僕は一人になりたいんだ！ そうやってあれこれ話しかけてくるのがウザいから、もうここにいたくないんだよ！ 出て行くって言ってるのに、引き留めたら喜ぶとでもおもったわけ？ オーリってほんと、おめでたい性格してるよな！ 孤児院のやつらがみんな自分を好きだと思ったら大間違いだ！」

沈黙。

叱られることを覚悟していたけど、オーリは何も言い返さなかった。

数秒、ハーランが振り向くのを期待するような時間を置いて、

「ごめんね……でも、また後で話そう。ハーランが嫌じゃなかったら」

そう言って、部屋を出て行ってしまおう。

待って、と叫びたかった。

謝って、抱きついて、いつもみたいに頭を撫でてほしかった。

だけどハーランはその場にしゃがみ込み、少しもおさまる様子がない下半身のたぎりを情けなく思いながら泣くしかできない。

「ごめんなさい……ごめん……ごめんオーリ……ごめん……」

ベッドに頭を押し付けるようにひざを折り、ズボンの前をくつろげて、そっと自分自身に触れる。

オーリに触れられることを思っただけ目を閉じる。  
ほっそりとした指、柔らかな手のひら——甘い香りが、まだハーランの鼻孔に残っている。

「あ……はっ……ああ……う……ん……ッ！」

声を殺して、快楽を追って、床に苦痛を吐き出した。  
そうすると、すっと頭が冷えて、激情が去った空虚を後悔が満たす。

「……あー……」

オーリに謝らせてしまった。

ただ、引き留めに来てくれただけなのに。  
ただ、いつもみたいに抱きしめてくれただけなのに。

「最悪……さい……あく……」

消えてしまいたい。

どうして自分はこんなにダメなんだ。

じわりと涙がにじんだ。

十四歳の時のヴィスクは、もっと大人だった。

少なくとも、大人になろうとしてた。

オーリの隣にふさわしくあろうとあがいてたんだと、今ならわかる。

それに比べて、自分はどうだ。

そばにいたいのに、そばにいることに耐えられなくて、引き留められて嬉しいのに、家族として見てくれる大切な人に汚らわしい情欲をたぎらせて、それを知られたくなくて乱暴な言葉で傷つけた。

こんな風だから——。

こんなに子供だから——。

「……僕がオーリでも、僕なんて選ばない……」

孤児院を出ることを決めた二日後には、ハーランの部屋は空っぽになっていた。オーリはその間、何度もハーランに話しかけようとしてくれた。だがそのたびに、ハーランはオーリを避けた。避け続けた。

それで、つまり、結局いきつくのはこういう状況だ。

「お前、孤児院を出るんだって？」

ハーランの手には、最後の荷物を詰めた旅行鞆。

迎えの馬車に乗りこむ寸前、ヴィスクに呼び止められての、今だ。

ハーランは御者に旅行鞆を手渡しながら、

「まあ、そろそろかなって」

と肩をすくめた。

ヴィスクの表情は不安げだ。

叱られると思っていたから、こういう表情は少し意外で、用意していた言い訳がどれも上手く出てこない。

「何か……あったのか？ 孤児院で、嫌なこと」

「嫌なことは別に。まあ、居心地はよくないよな。普通に」

「でも、オーリが……」

「——オーリが？」

「そばにいてくれる……だろ？」

あ、こいつ気づいてる。

そう思った瞬間、苛立ちがハーランの心臓に爪を立てた。

ハーランが——ハーランも“オーリ”のことが好きだって、気づいてる。

家族としてじゃなくて、恋人になってほしいと思ってるって、気づいてる。

「なあ、ヴィスク。今どんな気分？」

「……なに？」

「『みんな』のオーリの恋人になって、自分は彼女の特別な存在ですって顔して孤児院に入り浸るのって、どんな気分？」

「ハーラン、お前……」

「見るよ、ヴィスク。僕はもう十四歳だ。十四歳の頃、お前オーリをどんな目で見てた？ オーリに何がしたかった？ どうしてほしかった？ 優しく抱きしめてほしかった？ 家族みたいに？ それで満足だった？」

「……だから『出て行くのか？』」

脈絡がない。

ないけれど、ハーランにはわかった。

ヴィスクはハーランの欲望を知っている。

その欲望が許されないことを、ハーランもヴィスクも知っている。

「……そうだよ」

ハーランはうつむいた。

泣くまいと決めていたのに、最後の最後で、涙があふれる。

だって——。

「ヴィスクがオーリをとったから……！ 僕たちはみんな家族だったのに……！ ヴィスクがオーリを『女の人』にしたんだ！」

「今だって家族だ！ 俺もオーリもそう思っ——」

「いい加減にしろ！ 何が家族だ！ ——したんだろ？ オーリと……！ 汚いよな、ほんとに、ちよっと年上なだけなのに！ 僕が子供だからって抜け駆けしてさ！」

「ハーラン！」

「兄貴ぶるなよ。もう、お前の言う事なんて聞かない。僕は孤児院を出るし、友達だって自分で選ぶ。新しい家族だってな！」

用意していた言い訳の代わりに、溢れて止まらない本心を叩きつけて、ハーランは馬車に乗り込んだ。

窓から振り向きたい気持ちをこらえて、そっと、鏡ごしに走り去った道を見る。

ヴィスクはいつまでも、ハーランの馬車を見ていた。

小さくなくても、見えなくなっても、きっとそこに立ち続けていると思う。

ヴィスクはそういう性格だから。

「……好きだったのに……僕だって……」

オーリのことを——ヴィスクのことを。  
本当に好きだったのに。

「あーあ……嫌われちゃった……」

3

孤児院の個室から、自分で選んだアパートへ移って、あつというまに五日が経った。  
仕事を始めるのは半年後——十五歳になってからなので、正直、やることは何もない。

孤児院では起床時間も食事の時間も寝る時間も決められていたし、掃除も洗濯も自分たちでやっていたから、むしろやることは減ったくらいだ。

柔らかな絹のシーツに体を投げ出して、ハーランはぼんやりと天井を見つめる。

今が朝なのか夜なのかも分からない。

そもそも、なぜ自分は目を覚ましたのか——。

「ハーラン、いる？ ねえ、ハーラン」

ノックノック。

ああ、これか。

ハーランは起き上がり、寝ぼけ眼で玄関に向かう。

ドアを開けると、嬉しそうなオーリの顔。  
可愛い。

いや、じゃなくて。

「何？ 僕寝てただけど」

「よかった。出てくれた！」

「……ええ？」

あ、そうか。

しまった、開けなきゃよかった。

目を瞬き、ハーランは無言でドアを閉めた。

「あ！ え！？なんで閉めるの！？ハーラン、ハーラン！」

いるし起きてるとバレってしまったせいで、ノックの仕方に容赦がない。どうしたものか。

このまま放置してれば、大家が見とがめてオーリを追い払ってくれるだろうか。じつと耳をそばだてていると、やはり足音が近づいてくる。

「ちよっと、困りますよお嬢さん。そんなに大騒ぎして……！」

「あ……ごめんなさい。あの、でも……ハーランが……」

「わかってますよ。遊ばれたんでしょう？ あんたでもう何人目だか……」

ハーランはぎよっとした。

なんの話だ？

この部屋に引越してまだ五日だし、その間に女の来客なんて一度もない。

「もう諦めなさい。あんたみたいな子が、商家のお坊ちゃんなんて追いかけてもんじゃない。この部屋の男は特にダメだ。この間なんて、しつこく追い回してきた女の子にごろつきをけしかけて——」

「ちよ、ちよっと待ってそれ僕じゃない！僕じゃないよ！」

ハーランは慌てて飛び出した。

すると、オーリと家主が仲良くなるので、にまにましている。

「すみませんねえ、ハーラン坊ちゃん。坊ちゃんはまだ十四歳ですんで、未成年が部屋から出てこなかったら、後見人に協力しなきゃならんことになってるんですよ」

「お……オーリは僕の後見人じゃない！」

「はい。ですが後見人が信頼を置く部下でいらっしやる」

ハーランの後見人は、孤児院の院長だ。

そしてオーリは、その院長の部下である。

「ノックをされたら、きちんと対応する。それが大人ってもんですよ、坊ちゃん」

「それができない相手なら、警察を呼ぶことです。お呼びしますか？ 警察」

ハーランは困り果て、しおしおと肩を落とし、せめて部屋の中に入れることだけは拒みたくて外に出る。

そのハーランの手を、オーリがぎゅっと握って引っ張った。

「行こう、ハーラン！」

「行くって、どこに？」

「お別れ会だよ！ ハーランの！ 院のみんなで、大急ぎで用意したんだから！」

「お別れ会って……」

正直言って、少しも行きたくなかった。

だけど、決して離すまいとハーランの手を握るオーリの手を振り払えず、しぶしぶながら手を引かれるままに歩き出す。

歩いている間、オーリはずっと喋り続けていた。

ハーランがいなかった数日の間に、孤児院でどんな大事件が巻き起こったのか。その時にハーランがいたら、どんなに楽しかったか。

オーリは過去に戻ろうとしてる。

弟と、お姉ちゃんだったころの二人に、どうにかして。

でも、もう無理だ。

もどれない。

だって――。

「オーリ」

「ん？」

「好き」

「えー？ どうしたの急に。私もハーランのこと大好きだよ」

「……誤魔化すなよ」

ハーランは立ち止まった。

そうすると、オーリはもう、カづくではハーランを動かせない。

身長は、まだオーリの方が少し高い。

いや、ヒールの高さがあるから、もしかしたらもう同じかもしれない。

オーリはこれ以上大きくなれないけど、ハーランはまだ成長途中だ。

オーリが握っていた手を、今度はハーランが強く握り返す。

オーリは困り果てていた。

わかっている。

困らせていると、わかっている。

「……行こう」

何も言わないオーリの手を、今度はハーランが引つ張って歩き出す。

人にぶつかりそうになるオーリの体を引き寄せて、離れないように手のつなぎ方を変えた。指と指を絡めて、手のひらをびたりと合わせると、お互いの緊張が伝わってくる。

「僕、最高の恋人になるよ。絶対。オーリを世界で一番幸せにできると思う」

「うん……そうだね」

「歳の差だっけにしない。たった七歳だ……！あと三年と半分で、僕だって十八歳になる。その時オーリは二十五歳だろ？ 並んで歩いてても、全然おかしく見えないよ」

「でも、私が三十五歳の時、ハーランはまだ二十代だよ？」

「それでも全然おかしく見えない。オーリは五十歳になってもかわいいままだから。誰が何を言ってきたても、僕にとってはそうだから」

「うん……そうだったらいいね。でも——」

「でも？」

「ハーランはまだ十四歳で、これからたくさん素敵な女の人と出会って、その人を好きになるかもしれない」

「そんなことない。ありえない！」

「でも、ハーラン」

「ありえないってば！」

ハーランは立ち止まって、オーリに振り向く。

オーリは泣き出しそうだった。

そんな顔をされると、まるでいじめているような気分になる。

「なんでそんな……意地悪言うんだよ……！ 僕が好きって言ったら迷惑？」

「そうじゃないよ。ただ……後悔してほしくないの。市場で最初に目について、これだと思つて買ったとしても、あとからもっと気に入るものが見つかるなんて、よくあることですよ？」

「じゃあ僕がヴィスクより『いい商品』になったら、オーリはヴィスクを捨てて僕を買つてくれるの？」

「それは……」

「ヴィスクは十八歳でオーリに決めた。僕と四歳しか変わらない。十年後に、ヴィスクがオーリより好きな人を見つけるかもって思わないの？ オーリはどうしてヴィスクと付き合つたの？ 十年後にどうなるかなんて、どうでもいいって思ったからじゃないのかよ！ 僕だつてそうだ！ 僕は今、オーリのが好きなんだ！」

「——道の真ん中で……子供みたいに大騒ぎするなよ、恥ずかしい奴だな」

声に頭を殴られたような気分で、ハーランは蒼白になって振り向いた。見上げるような長身の青年が、呆れ顔でハーランを見下ろしている。

「ヴィスク……なんで……」

「オーリだけじゃ、お前を部屋から引つ張り出せないかもつて院長に言われて、加勢に向かう途中。——で、これ何の話？」

ヴィスクの視線が、ちらと、オーリとつなぎ合った手を滑る。

この手を、きつとオーリは振り払うだろうと思った。

だけどオーリは、むしろハーランの手を強く握り返してくれる。

「ハーランは私のことが大好きって話」

「ふーん？」

ヴィスクはじろりとハーランを見下ろす。

この視線に、いつもひるみそうになる。

決して手を放すまいと思っていたのに、ヴィスクは無言でオーリとハーランの手首をつかむと、無理矢理引きはがしてしまった。

そしてそのまま、ヴィスクはオーリとハーランの手を握つて歩き出す。

「お、おい……！ なんだよヴィスク！」

「別に。わがまま放題の弟と、弟に死ぬほど甘い『お姉ちゃん』と一緒に歩いてるだけ」

「僕は別にお前となんて歩きたくない！」

「俺は歩きたい」

「は……？」

「これからも、こうやって、お前やオーリと歩きたい」

「そんなの……！」

「で、別れた」

「——は？」

ハーランはヴィスクと、その隣のオーリを交互に見る。

ヴィスクは苦々しげに正面を見据えて歩き、オーリは少し困ったようにハーランを見る。

「お前の言う通りだよ。抜け駆けした。お前がオーリの事好きだって知ってたのに、俺の方が先に大人になったから……」

ヴィスクは深くため息をつく。

「ずるいってわかった。逆の立場だったら、俺は俺を許さない。それでも、我慢できなかった。どうしてもオーリが欲しくて……俺だけのにしたくて……」

「だったら……！」

「だから、お前にもチャンスやる。四年間だ。お前が十八歳になったとき、オーリに俺がお前かを選んでもらう。それまで、俺とオーリの恋人関係はいったん解消。俺とお前は、今日から正式に恋敵になる」

なんて、目がくらむような清々しさ。

だからハーランは、ヴィスクのことが好きだったのだ。

自分にも、他人にも厳しくて。

公平であろうともがき。

間違えれば粛々と正す。

すっと伸びた背筋と、いつも誰かを睨むような厳しい視線——その視線がオーリを見つめていることが悔しくてたまらなかった。

ヴィスクにかなうはずがないと、知っているから。

「……オーリは、それでいいの？」

「いいというか、悪いというか……そもそも私にそんな取り合いをするような価値があるとは……」

「それはある」

ヴィスクとハーランの声が重なって、オーリは居心地悪そうにごによごにと言って小さくなる。

「つつーか、オーリの方が別れようつて言ってきたんだよ。俺は振られたの。お前のせいで」  
「え!？」

「振ったんじゃないよ！ でも……院長先生にも言われたから……ほかの子供たちに悪影響ができるような付き合いは感心できないつて。確かに、お兄ちゃんとお姉ちゃんが急に付き合いましたら、なんか仲間外れにされた感じになるよなつて思って……ハーランが大人になるまでは、一回距離を置いた方がいいんじゃないかなつて……」

「ええ……？ いや、普通にヴィスクが可哀想だよそれ……」

「そう思うだろ!？ この五日間まったく勉強が頭に入ってこなかったんだからな!」

「ご、ごめんねヴィスク……!」

「いいけど、別に……俺もモヤモヤしてたし……」

ヴィスクはため息をつき、立ち止まる。

もうすぐ目的地——イスクム司祭院だ。

ヴィスクが手を離すと、三人とも手が汗でしっとりと濡れていて、それぞれなんとなくこしこしと手汗をぬぐう。

ふと、オーリはへらりと笑った。

「まあ、四年の間に、ヴィスクもハーランも、それぞれ好きな人ができるかもしれないし」  
「それは絶対はない」

再びヴィスクとハーランは声をそろえ、オーリは「うーん」と眉根を寄せた。

END